

BGM

Revised by Y.M.O

僕はその町に暮らすことに決めた。

低く淀んだ空。風がとっても強い。

繁華街。展望台。海に流れ込む川。人の流れに巻き込まれ。

スピーカーから一斉に響き渡る声、皆さん、ショーの始まりです、お集まり下さい、それは、クレープをほおばる少女や、手をつないでウインドウを眺めるカップルや、はしゃぐ子供を連れた疲れた顔の夫婦と、すれ違う。

低く淀んだ空。風がとっても強い。

僕は、町に早く着きすぎ、暇をもてあました。「海岸」という矢印が指す方に向かって歩いた。

繁華街。展望台。海に流れ込む川。人の流れに巻き込まれ。

ショーの司会者が彼女を呼び、彼女は真っ赤なドレスに身をまとい登場し、美しい馬を二頭引き連れ、パカパカと、蹄がアスファルトを鳴らし、男の子が、馬に近づき、足で蹴ろうとすると、彼女はその子の前に近づき、指をパチンと鳴らし、すると、彼女の髪が爆発し、大きく逆立ち、男の子は怖気づき、後ずさりする。

彼女は、二頭の馬を紹介する。

左がテルです。そして右がナラです。

低く淀んだ空。風がとっても強い。

小道を抜けると車道。その先は海。砂浜はない。

ただ、波が、あらあらしく打ち寄せていた。

繁華街。展望台。海に流れ込む川。人の流れに巻き込まれ。

司会者が僕を呼び、僕の出番だと、左の掌に、右手人差し指で書く、おかねと、そして、それを飲み込み、舞台に出て、目の前の女の子に鼻を触ってもらい、鼻がむずむずすすし、くしゃみをし、出たのは、オのフンという吼え声、大成功、なんと、女の子は泣き出してしまった。

低く淀んだ空。風がとっても強い。

海の前に立ちぼんやりとしていた。突然、大粒の
ひょうが、敵意のある勢いで、低く淀んだ空から
降り注ぎだした。

繁華街。展望台。海に流れ込む川。人の流れに巻き込まれ。

テルはレフティ、後ろ足で立ち上がり、彼女の投げたりんぐを、左足で蹴り返し、ナラは前足で倒立してみせ、ねえ、映画始まっちゃうよ、と言う声や、拍手や、笑い声の中で、彼女はお辞儀をする。

なんでこんなことをしてるんだろう？

しょうがないだろう。

ほかにやりようがないのかい？

ないよ。あの赤いニンジンをつこの口に入れる方法
はこれだけさ。

逃げ出したい。

どこへだい？

低く……

無数の大粒のひょうが僕を襲う。目の前に美術学校への進学のための建物。その横に、喫茶店。入る。ねじり鉢巻の年配の男性が注文を聞きに来る。頼んだコーヒーは、サイフォンに入って運ばれて来る。カップに注ぎ、ゆっくり飲む。サイフォンに残ったコーヒーをカップに注ぐ。ぴったりカップに収まる。外は、さっきまでのひょうは消えている。空には太陽がでている。僕は来た道に戻った。

低く淀んだ空。風がとっても強い。

この町でのショーは終わった。次の町へ向かう列車
まで時間がある。駅前の店に入る。

低く淀んだ空。風がとっても強い。

テルとナラは、次の町に移動するため檻に入れられる。

低く淀んだ空。風がとっても強い。

テルが後ろ右足で立ち上がる。ゆっくり左足を後ろに引き上げる。美しい軌跡を描き。左足が唸る。

一つ外れた檻の鉄棒。檻は崩れ去る。

低く淀んだ空。風がとっても強い。

料理を注文し、何気なく見ると、店の奥に、彼女がいて、一瞬、目が合い、僕は列車の出発時間ギリギリまで店にいて、あわてて、店を飛び出し、少しのんびりしすぎたと、全速力で走り、振り返ると彼女も走っていて、もうほとんど列車の出発時間で、あたし、もういいやと、立ち止まったらしく、声が、明るく響く。

低く淀んだ空。風がとっても強い。

列車の窓から、テルとナラが、風にたてがみをなびかせ、低く淀んだ空、疾走しているのが見える。

低く淀んだ空。風がとっても強い。